

日坂の松籟

城所福之助

「狸」

さきに同窓会名簿が立派に出来上がり今回は会報が出来る由何よりです。私にとっては鎌高は第二の故郷で何かにつけ思い出が付きません。

何か原稿をと言われ当り前の事を書いたのでは諸君もよく読んでくれないし又興味もなからうと思ひ、ひとつ「鎌高と狸」の話をしましょう。

これはフィクションでなく実際にあった事です。

或る年の或る日それは未だ御成小学校から引っ越して間もない頃です。

今と違って山は深く峰には老松が一ぱい生い茂って人家と言えば鎌高入口にただ一軒だけでした。昼間は何百という生徒がいるのでとてもにぎやかですが夜になると先生方も生徒も一人と残らずとても寂しいものでした。

学校の管理のため昔は先生方が一人ずつ残って宿直をしたものです。

或る朝私が出勤すると昨夜の宿直の先生がやってきて、

「校長さん、私は宿直は嫌です。」と言う。

「どうしてですか。」と言うと、

「真夜中頃、通路に引いてあるすのこがカタカタと鳴るのです。誰か来たのかと闇をすかして見ても何も見えません。何か気の迷いだらうと寝床に入ると又カタカタと鳴る。飛起きて見ても同じよう、何もいない。実にこわいし嫌なものです。だから宿直から私を免除して下さい。」と言う。

私は思わず吹き出して笑い乍ら、

「今は昭和の世の中ですよ。今頃そんな妖怪変化の話は通用しませんよ。それより宿直するのが嫌だと言ったらどうですか。」と言うと、

真面目な顔で、「それは本当なんです。うそは言っていません。」と言う。

「まあお話は承りましたよ。今日はゆっくり休んで下さい。」と帰した。翌日違う先生が宿直すると全く同じような申出を私に言って来た。

「又変化の事ですか。」と冷やかすと、

「先生は信用しないんでしょうが本当です。」と答える。

どうもおかしいので、では私が調べましようかと警察に話して、心安くしている刑事に来て貰い以上のことを説明した。

刑事は、「いいですよ。今夜私が寝ずに見張ってそのいたずらをする奴を捕まえて上げましよう。」と言う。

時期は十二月で、あの辺は霜で真白である。

翌日私が出勤すると刑事が「ああ分かりましたよ。」と笑い乍ら言う。

「やはりいたずらだったんでしょう。」と言うと

「いや犯人は狸です。」と言う。

さすがに私も驚いて、「今頃狸が出るのですか。狸が化かしたのではないですか。」と言うと、「いやこの裏山には狸が沢山に住んでいて学校の残飯を取りにやってくるのです。で通路のすのこの上を渡るのでカタカタと音がするのです。」

全く笑いもので先生方にその話をしたら皆に大笑いされた。つけ加えますが、その狸は必ずアベックで来たそうです。どうも卒業生、鎌高の生徒にアベックが多く出るのもこの狸のしわざかもしれません。